

「宗門寺院と戦争・平和問題」調査報告(その7)

—空襲・原爆等の寺院被害1—

新田光子 (戦時被災等調査委員会委員
「戦時調査室」調査担当)

渡辺慶子 (「戦時調査室」調査研究員)

「宗門寺院と戦争・平和問題」調査につきまして、今号では、「空襲・原爆等の寺院被害」をテーマにご報告いたします。

最初に、昨年度実施させていただきました郵送調査の設問に関連し、空襲・原爆による日本全国の被害について少し説明させていただきます。

1、日本全国に対する爆撃

日本本土に対する連合国軍による空襲は、1942(昭和17)年4月18日、東京、川崎、横須賀、名古屋、神戸などへのドゥーリットル率いる米陸軍航空軍による爆撃、いわゆるドゥーリットル空襲が最初でした。死者87人、重軽傷者260人以上、家屋全半壊280戸以上の被害を受けました。

その後しばらく本土に空襲はなかったのですが、1944(昭和19)年6月、中国の基地から出撃した大型爆撃機B29によって北九州が爆撃されました。しかし、本土空襲が本格化するのには、アメリ

カ軍が占領したマリアナ諸島に航空基地を確保してからのことでした。主要都市に対する本格的な爆撃がなされるようになったのは、1944(昭和19)年末からでした。1945(昭和20)年3月10日の「東京大空襲」では、一夜にして約10万人の死者を生じさせたと言われています。東京大空襲後は大量の焼夷弾を投下する無差別爆撃が一般化し、6月以降、全国の中小都市を目標に大規模な無差別爆撃がなされるようになりました。8月6日、9日には、広島、長崎に原子爆弾が投下され、8月14日夜から15日にかけての全国4都市への空襲が続きました。

本土空襲は、大型爆撃機による爆撃だけではなく、小型戦闘機による爆撃や機銃掃射も含まれています。沖縄や北海道では戦闘機による被害が甚大でした。

また、航空機だけではなく、艦砲射撃による攻撃もおこなわれました。1945(昭和20)年7月、8月には、米英両海軍が岩手県釜石などに艦砲射撃をおこない、多くの犠牲者が生じました。沖縄

戦での攻撃にも艦砲射撃の攻撃力は、大きなものでした。

本土空襲では、米軍の出撃機数は延べ3万機、393市町村が爆撃され、50万人から56万人が死亡したと推計されています。原爆だけを見れば、広島では1945（昭和20）年12月までに死没者が14万人と推計され、長崎では1950（昭和25）年に推計された死没者は、7万4千人でした。

沖縄では1945（昭和20）年の地上戦による人的被害が甚大で、空襲による被害を確定して推計することが困難です。沖縄戦での沖縄県出身者のうち一般人犠牲者は、沖縄出身軍人・軍属死没者

約2万8千人を優に上回る10万人近くにはまりました。

こうした日本全国の被害実態をもとに、このたびの調査では問いかけをさせていただきました。設問および回答結果の概要は、以下のとおりです。

（注）平塚証緒『米軍が記録した日本空襲』草思社、1995年、東京都編『東京都戦災誌』明元社、2005年、荒敬「米国海軍太平洋艦隊の日本空襲と艦砲射撃——第三艦隊の沖縄戦から敗戦まで——」粟屋憲太郎編『近代日本の戦争と平和』現代資料出版、2011年、小山仁示訳『日本空襲の全容 米軍資料 マリアナ基地B29部隊』東方出版、2018年、

NHKスペシャル取材班『本土空襲全記録』角川書店、2018年、松本泉『日本大空襲——米軍戦略爆撃の全貌』さくら舎、2019年など参照。

2、調査票の設問・回答結果の概要

（1）調査票の設問・回答数

郵送調査票（問26）「昭和17年4月、最初の日本本土爆撃（いわゆるドゥーリットル空襲）がありました。被害を受けましたか」の問いかけ、ならびに（問27）「昭和19年から終戦にいたるまで、連合国軍による空襲や原爆、機銃掃射や艦砲射撃などによって、日本各地で大きな被害を

教区名	回答数
北海道	8
東北	4
東京	33
長野	0
国府	0
新潟	9
富山	24
高岡	1
石川	2
福井	15
岐阜	9
東海	16
滋賀	5
京都	1
奈良	2
大阪	63
和歌山	14
兵庫	32
山陰	1
四州	9
備後	5
安芸	43
山口	10
北豊	2
福岡	12
大分	8
佐賀	6
長崎	10
熊本	19
宮崎	4
鹿児島	15
沖縄宗務特別区	0
合計	382

図表1 教区別回答数

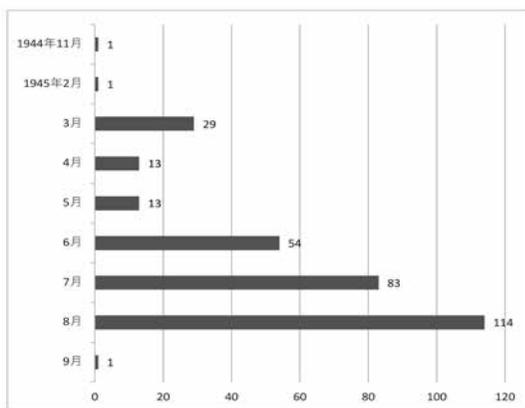
受けることになりました。貴寺院はいかがでしたか」の問いかけに対して、「被害があった」の回答は、382ケースでした。教区別回答数は、図表1のとおりです。

「被害があった」と回答があった寺院には、さらに次の5項目（a～e）の問いかけをして、回答をそれぞれ項目ごとの自由回答欄に記述していただきました。

- a 月・日を教えてください。
- b 本堂など建物被害状況について教えてください。
- c 住職世帯の人的被害について教えてください。
- d 門徒の人的被害について教えてください。
- e 被害が寺院活動に及ぼした影響を、具体的に教えてください。

(2) 「被害があった」時期

「被害があった」の回答について、a「月・日を教えてください」と尋ねましたら、回答は次のとおりでした。

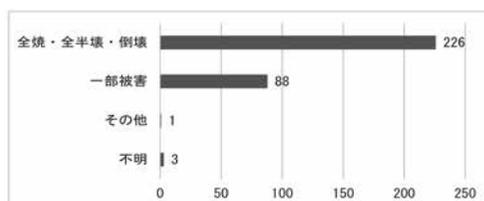


図表2 「被害があった」時期
「不明」「無回答」を除く記述回答309について。

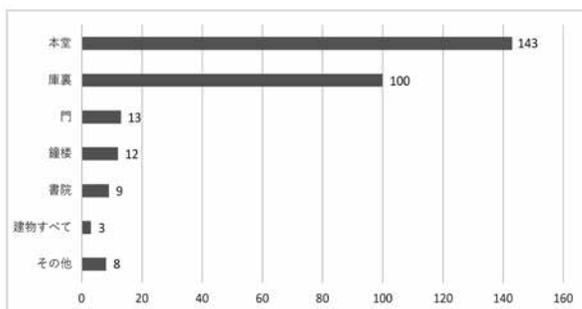
被害は1945（昭和20）年に入ってから、とくに同年7月、8月の被害に集中したことが明らかです。

(3) 建物被害について

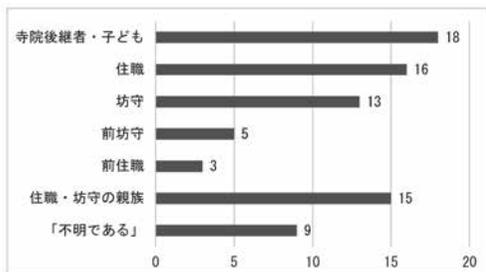
b「本堂など建物被害状況について教えてください」の問いかけには、次の図表3・図表4のような回答を得ました。



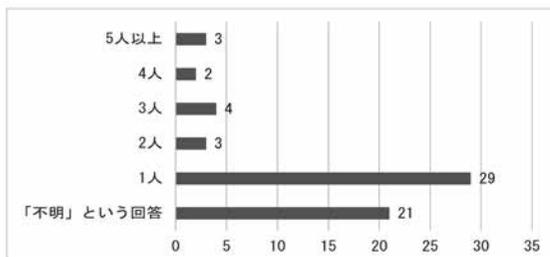
※その他：「不発弾が着弾」。
図表3 被害状況 記述回答318について。



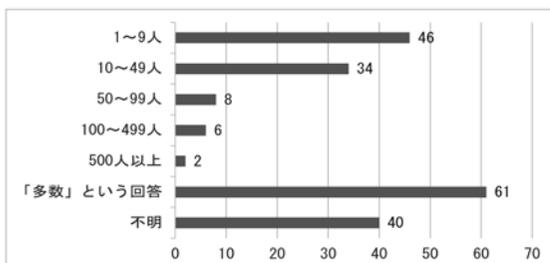
※その他：「蔵」「客殿」「塀」など。
図表4 被害にあった建物箇所 記述回答288について。



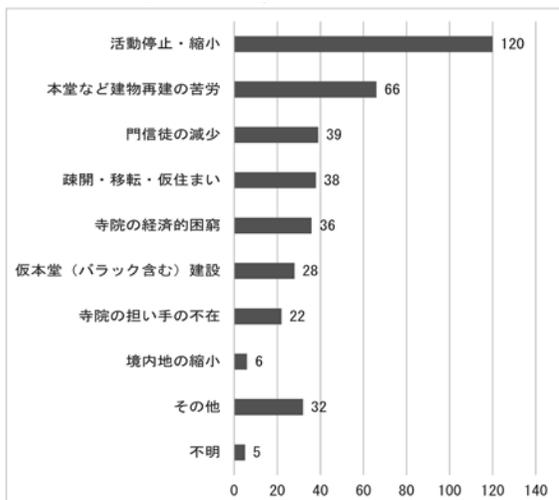
図表5 住職世帯の被害者の属性 記述回答62について。



図表6 住職世帯の死者数 記述回答62について。



図表7 門徒の死者数 記述回答197について。



※その他:「遺体安置所」「救護所」「避難所」になった、など。

図表8 被害が寺院に及ぼした影響

記述回答237について。回答の一部は複数項目に該当しており、計392の内訳を示す。

(4) 住職世帯の人的被害

c 「住職世帯の人的被害について教えてください」の問いかけには、次の図表

5・図表6のような回答を得ました。

(5) 門徒の人的被害

d 「門徒の人的被害について教えてください」の問いかけについて、死者の人数が記載されていた回答内訳は、図表7

のとおりです。

(6) 被害が寺院に及ぼした影響

e 「被害が寺院活動に及ぼした影響を、具体的に教えてください」の問いかけの回答内訳は、図表8のとおりです。

3、寺院回答事例

「被害があった」回答（回答382）について、以下では、上記a～eの問いかけに関して、より具体的な記述があったものを回答事例としていくつか列挙させていただきます。

図表9 回答事例

寺院	教区	a 年月日	b 被害状況	c 住職世帯被害	d 門徒被害	e 被害の影響
①	東京	1945年 3/10	本堂・庫裡、全焼。	(無記入)	不明。	住居を失い、親類をたよって福島へ移住。その後、転居をくり返し一切の活動ができなかった。
②	東京	3/10 (同年。 以下も同 年で、年 次略)	全焼。当時、寺は墨田区亀沢町に在り、東京大空襲では、寺も門徒も壊滅的な被害を受けた。町全体焼土になり、資料も何も残っていない。	坊守は子供3人とともに実家の新潟に前年より疎開し無事。住職と前坊守は命からがら避難。	大勢亡くなったが記録に残されていない。	月に何回もあったお説教日も、戦況が悪くなるに従って、疎開する人もあり、寺院活動もできなくなった。生きるのが精一杯だったようだ。焼け跡に大勢が残っていたが、けがの治療に行つて戻ってみるとなくなっていた。心がすさんで行く状況の日々だったと伝わる。
③	東京	4/13	本堂・庫裡等、全焼。	なし。	昭和16(1941)〜20(1945)年の戦死・戦病死は57名、昭和20年の空襲死者は33名(過去帳より)。	本堂が焼失して法務ができなくなった。防空壕で暮らし、バラック、木造仮本堂、鉄筋コンクリート本堂昭和40(1965)年建設、日本堂の堂内荘厳等に復旧したのは平成28(2016)年であった。
④	東京	5/25	本堂・庫裡・鐘樓・正門等、全焼。	なし。	戦死者多数、家屋全半壊の門徒が7割以上。	最終戦後六畳一間のバラックからスタート。焼野原で野菜等を作り餌えをした。その後、火災保険代理店をしながら本堂復興のための資金づくりをする。
⑤	新潟	8/1	本堂・庫裡、全焼。	祖父(14代住職)が死亡。	約50名の門徒が死亡。	昭和23(1948)年頃まで何の活動もできなかった。父が復員後、昭和22(1947)年春頃から葬式等の仏事を再開した。昭和23年頃よりバラック建の庫裡で保育園を開園した。
⑥	新潟	8/1	全焼(焼失)。	なし。	空襲による死者は十数名。	本堂・客殿・庫裡を全焼失し、バラックから始まり、戦後再建するまでご門徒の皆様と共に苦労したとことである。
⑦	富山	8/1	全焼。	なし。	不明。	空襲により、門信徒が全て焼き払われ、数年間は命日参りができなかった。本堂再建は昭和32(1957)〜33年頃で、この頃ようやく諸行事も開始された。
⑧	富山	8/2	富山市市街地の95%が焼失し、2000〜3000名の死者が出たと言われる。本堂・庫裡等すべて全焼。	なし。住職は出兵中、坊守、前坊守、前々坊守の3名が当時住居(ただし老齢の前々坊守は親戚寺院へ疎開)するのみで被害はなかった。	東京大空襲では5名、富山空襲の時に9名が戦死。	9月に住職が千葉の出征地から除隊、帰寺したが、すべてが焼失し、郊外の門徒宅に疎開した。その後、寺の敷地にはった小屋を建てて居住するが、ほとんどの寺院活動はできなかったと思われる。
⑨	福井	7/19	本堂・庫裡等、全焼。	なし。住職が消火に当たった際、両手に火傷を負った。	福井市内在住の門徒14名が戦死。	空襲により境内建物全てが焼失し、あとは、急ごしらえのバラック(一間)で家族7名が生活していたので、昭和21(1946)年6月に本堂が再建されるまでは、納骨参りをはじめ、寺でのお参りは一切できなかった。
⑩	岐阜	7/9	本堂・書院、座敷・庫裡、焼失。鐘樓のみ焼失をまぬがれる。	なし。	6家族が全員死亡。7家族が一家につき1人〜2人死亡。	焼失をまぬがれた鐘樓に阿弥陀如来(本尊様)を安置し礼拝の場所とした。当寺住職は出征中で不在だったが、住職の弟が代行した。
⑪	東海	7/17	全焼。	(無記入)	桑名は7月17日(焼夷弾)と7月24日(爆弾)、2回の空襲にあい、24日に9名が亡くなった。	寺院全焼のため疎開先のお世話になった。農作業や子守りなどで生計を立てていたが、その折に葬儀も執行していた。焼跡にバラックを建てていただき、一部を畑として作物を収穫した。
⑫	東海	7/17	本堂・庫裡・山門・別棟書院、全焼。	住職長女が空襲から避難するなか、体力を消耗して床につき9月12日死亡。	3月12日、名古屋空襲で1名死亡。3月10日、東京空襲で8名死亡。7月17日、桑名空襲で1名死亡。	住職とその家族は、昭和20〜23年まで寺を離れて約10kmのところへ疎開(避難)したため、空襲で全滅した桑名市内の門徒とは疎遠になってしまった。そのため相当数の門徒を失った。戦後60年間は本堂・庫裡・書院の復興の歴史であった。その間に什物類も順次、整えていった。

寺院	教区	a 月日	b 被害状況	c 住職世帯被害	d 門徒被害	e 被害の影響
25 鹿兒島	鹿兒島	8/8 8/9	本堂・庫裡等、全焼。	なし。	空襲による死亡者あり。	昭和9（1934）年に落成したばかりの本堂等が全焼し、ほぼ全市が空襲によって焼失したため、昭和43（1968）年まで仮本堂のみであった。
24 鹿兒島	鹿兒島	8/8	本堂・庫裡、全焼。	なし。	なし。	戦後、しばらくして隣の家を借りて法事を行ったが、法要・儀式は一切できなかった。寺院が所有していた山を開放して、門徒さんの食料確保のために農作物を作っていた。のちに山を売って本堂再建の資金にあてた。
23 長崎	長崎	8/9	本堂屋根一部焼。	当時の坊守の姪が原爆死。坊守と長女も被爆。	門徒多数被爆、爆死。	原爆被災により、門徒が多数離散した。寺院の修復、維持、宗教活動に多大なる影響があった。
22 安芸	安芸	8/6	原爆の爆風を受け本堂の建具・仏具等が吹き飛ば。	住職の次男が13歳で被爆、死亡。	多くの門徒が亡くなり被害は甚大であった。	被爆後、寺が被害者の収容所となり、看病とともに亡くなられた方の身元確認や火葬を数多く行い、平常に戻るまでには数か月かかった。
21 安芸	安芸	8/6	本堂・会館・庫裡すべて、爆風で倒壊。	住職が被爆1か月後に原爆症で死亡。住職三男が本堂の下敷きになり死亡。住職三女が被爆1か月後に原爆症で死亡。住職次男が学校教育として生徒の勤労奉仕引率中に被爆し、似島に運ばれ死亡。	原爆により一家全滅した家もあり、子どもだけ残され親戚をたらい回しにされたケース。また、原爆症で長く苦しみ人生が狂ってしまった方々。被害状況は種々。	被爆直後から、倒壊した本堂の屋根を指摘して、門徒の人々が亡くなった家族の葬儀の依頼に来ていたという。住職も原爆症の症状が出るなか、葬儀を行っていたそうだが1か月で亡くなった。その2年後に満州より引き揚げて来た長男の後継住職も、あまりの惨状に2年ばかり、何もできなかったと聞いている。
20 安芸	安芸	8/6	原爆により全壊（爆心地より300m）。	当時の住職、坊守が死亡。	広島市内に在住のため人的被害は大きかった	自坊が平和公園内にあったため移転した。また、長く不明だった門徒の消息も原爆33回忌の頃（昭和52（1977）年）には明らかになってきた。
19 安芸	安芸	8/6	全焼。	自坊内にいた当時の坊守が死亡。	広島市内中心部の門徒の多くが死亡。	寺院が全焼したため、郊外の説教所に無事だった当時の住職、疎開していた子弟が移り住んだ。焼け残った墓石は田舎の寺門徒がリヤカーで運んでくれたと聞いた。
18 兵庫	兵庫	3/17	本堂等境内全焼。	なし。	戦中、戦後直後の過去帳が不明確なため、不明門徒の大半は離散したと伝えられている。	終戦後、境内地がアメリカ軍に接収され、昭和36（1961）年の移転再建まで活動できなかった。
17 大阪	大阪	無記入	本堂・鐘樓の屋根に被弾。	なし。	防空壕付近で被爆。	被爆による死亡者の遺体が本堂や境内に安置されていた。
16 大阪	大阪	6月 日付は 無記入	全焼、全壊。	なし。	不明。	本堂・庫裡等が全壊したため、昭和25（1950）年頃まで寺院活動ができず、長屋の仮住まい生活をしてきた。境内地の3分の2を売却して仮本堂を再建し、昭和43（1968）年頃まで借金返済が続いた。
15 大阪	大阪	6/10	本堂・庫裡・蔵、全焼。	なし。	不明。	本堂・庫裡など寺院活動の基礎が戦禍にあり、昭和57（1982）年の本堂再建まで法要の厳修等寺院活動に支障をきたすこととなった。
14 大阪	大阪	3/13 14	本堂・山門・庫裡・客殿等すべての建造物が焼失し、灰じんに帰した。	なし。	余りにも多すぎて把握できず。	空襲被害の前後で門徒は疎開を始め離散した。本堂・庫裡も再建できず、門徒徒のつながりも途絶えたため、昭和20年代は寺院活動自体ができなかったと聞いた。
13 東海	東海	7/24 7/26	7/24に全焼・全壊。	なし。	過去帳記載分だけでも、7/24に15人、7/28に5人が亡くなっている。	本堂・庫裡が全焼。門徒宅も多く被災のため活動ができず。住職家族も仮住まいで、経済的にも大変な状況であった。

「空襲・原爆による寺院被害」は、東京・富山・福井・大阪・神戸など各地の空襲、広島・長崎の原爆、地域ごとの寺院被害について引き続き調査を続けております。ドゥーリットル被害の実態については、まだ把握できていません。この時期の被害は、のちの空襲被害に比べると被害規模は大きくなかったかもしれませんが、寺院に直接被害がなかったとしても地元で大きな被害が生じた可能性があります。また、直属寺院のなかには空襲・原爆によって焼失し、甚大な被害を被った寺院も数多くありました。これらについても情報をお寄せいただきましたら、適宜本誌等でご報告させていただきます。

戦時調査室で引き続き寺院被害の記録を蒐集しておりますが、被害の記録とは、具体的には、寺院の被害前の写真と被害後の写真、公式の被災記録・証明書、新聞記事、区市町村史の記事などです。調査は「戦争と平和の問題」という視点から各寺院の歴史的事実を記録にとどめ

ることを目的にしております。次号『宗報6月号』では、今号に続き「空襲・原爆等の寺院被害」についてご報告いたします。

この調査のとりまとめとして、今年度2021年11月～12月に「宗門寺院と戦争・平和展」（仮称）開催を予定しております。調査結果ならびに各寺院からご提供いただきました記録の宗門内外における情報共有の機会とさせていただきます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

資料のご提供先・お問い合わせ先

【戦時調査室】

開室時間：火・水・木 10時～12時、
13時～16時（宗務所休日は除く）
〒600-8349

京都市下京区堺町92

浄土真宗本願寺派総合研究所内

「戦時調査室」

Tel/075-354-5087

Fax/075-354-5360

Mail/senji-chousa@hongwanji.or.jp

新田光子（戦時被災等調査委員会委員）

渡辺慶子（調査研究員）

牛島悠紀（調査研究員）